

新南九州弥生式土器集成

河 口 貞 徳

日本考古学協会から出された弥生式土器集成が出されてから（昭和89年）相当の年月をへて資料も増加し、編年についても新しい研究が加わったので、これらを加えて新しく土器集成をこころみた。南九州の弥生式土器を8つに分類し、前期をⅠ、Ⅱとし、中期をⅢ、Ⅳ、Ⅴとし後期をⅥ、Ⅶ、Ⅷとした。次に各様式別に記述する。

第Ⅰ様式（1—9）（集成Ⅰ）

第Ⅰ様式は、胎土に多く砂粒をふくみ、壺形土器をのぞくと、表面に研磨のあとがみちるしく、黄褐色を呈したものが多く、文様は篋描文・貝殻腹縁文および凸帯を用い、赤色顔料による彩文も少量みられる。器形は壺・鉢・高杯・甕および壺蓋などが知られている。1より9まですべて高橋貝塚下層出土の土器である。

第Ⅱ様式（10—16）（集成Ⅰ）

第Ⅱ様式土器は、壺形土器は頸部が短かく、肩部との界の沈線を失い、文様は弧文を多くもちい、あるいは無文となる。壺形土器は胴部にわずかに張りがあり、外反する口縁部の外側に刻目を施す。胎土、器面調整など第Ⅰ様式に近い。10—16まで高橋貝塚出土である。

第Ⅲ様式（17—22）（集成Ⅰ）

第Ⅲ様式土器は、中期前葉に位置するもので、壺形土器・甕形土器に特徴があり、壺形土器は前期の様相を残し、頸部と肩部の界に2条の沈線をめぐらし、頸部のしまりがよわく、口縁端で外反する。重心が高くなっている。壺形土器は充実した器台を有することが特徴であり、これもやや上げ底状となっている。口縁部は逆L字状を呈し外側に刻目を施す。頸部に1条の沈線をめぐらす。甕用の蓋形土器がみられる。17—22まで入来遺跡出土である。

第Ⅳ様式（23—32）（集成Ⅰ）

第Ⅳ様式土器は、中期中葉に位置する。地域的な特徴が定着すると同時に移入土器と考えられる

ものが共存するようになる。壺形土器では28・24は地域的特色のよくあらわれたもので、29・30は北九州系統のものである。31は一の宮式の先行型式で薩摩半島に分布するものである。壺形土器は充実器台は前様式と同様であるが、底部は平坦で上げ底になることはない。口縁は逆L字状を呈する。28-25、29・30は大崎町吉ヶ崎出土、26-28は山ノ口、31・32は入来遺跡出土である。

第Ⅴ様式(38-44)(集成Ⅱ)

第Ⅴ様式土器は中期後葉である。壺形土器は頸部でしまり、外反して口縁部の大きく開く器形で、胴部の張った小さな平底で、頸部と胴部に4条あまりの三角形の凸帯をめぐらす。口縁部の2叉に分れるもの、広口の壺などがある。甕形土器は逆つり鐘状で充実した器台を有し、口縁部は平坦面を形成するがやや内傾している。40-42の須玖式土器は移入品とみられるが、共存関係にある。43・44の土器は一の宮式で結縄凸帯をめぐらす点に特色がある。38-39は山ノ口、40-42は成川、43・44は一の宮遺跡出土の土器である。

第Ⅵ様式(45-48)(集成Ⅱ)

第Ⅵ様式土器は後期前葉である。山ノ口式よりの移行の様子がよくわかる土器である。壺形土器は小さな平底を有し、頸部と胴部に三角凸帯をめぐらすもの、胴部のみに凸帯をめぐらし一部の凸帯に刻目を施すものなどがある。口縁部が2叉に分れるものもある。甕形土器は中空の上げ底器台となるが、わりに低い。口縁部内面に稜線を有し、外反して広い平坦面を形成する。45-48すべて金峰町松木菌遺跡出土の土器である。

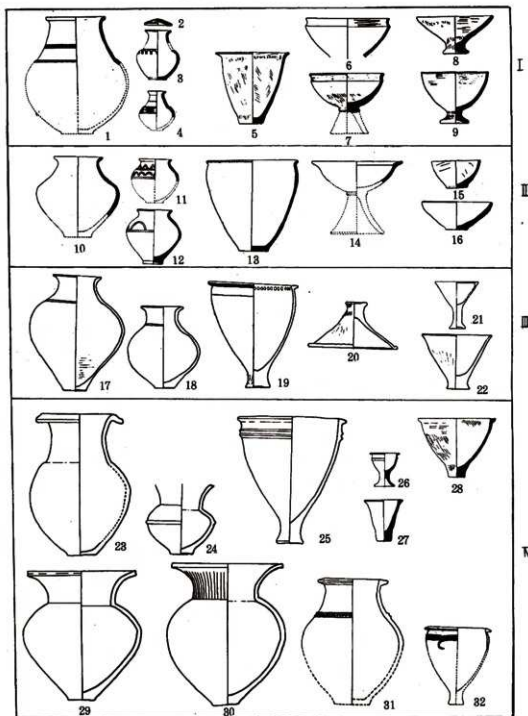
第Ⅶ様式(49-52)(集成Ⅱ)

第Ⅶ様式土器は後期中葉である。壺形土器はなお小さな平底であるが、胴部に1~2条の三角凸帯をめぐらし、口縁部は外反する。甕形土器は中空の器台が定形化する。口縁部内側には稜線を形成して外反する。49-52は松木菌遺跡出土の土器である。

第Ⅷ様式(53-58)(集成Ⅱ)

第Ⅷ様式の土器は後期後葉である。壺形土器は丸底となり、胴部に刻目凸帯を1条めぐらすものと、凸帯のないものがある。甕形土器は中空の器台をつけ、口縁部外反の角度は弱くなるが、なお稜線を残す。甕および壺用の浅い蓋形土器がみられる。53-58の土器は金峰町中津野遺跡出土の土器である。

新南九州弥生式土器集成 I



新南九州弥生式土器集成Ⅱ

